

---

# 雨音～クロの真実～

紅玉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雨音／クロの真実／

### 【Zコード】

Z5799A

### 【作者名】

紅玉

### 【あらすじ】

紅玉の恋愛作品『螢影』のサイドストーリー。恋愛要素はないですが、隠れた物語が明らかになります。犬のクロ、彼がいなくなつた理由は…

雨はキレイだ。俺の体温を奪う。すきつ腹に冷たい雨が染み込む。奴は俺の命を奪おうと、容赦なくその身を俺に打ち付ける。だから雨はキレイ。

今日も冷たい雨が降っていた。

何とかパン屋で一つくすねられたが、足りない。仕方ない。これが野良のさだめ。何処で野垂れ死のうが、一匹の犬が死んだところで何も変わりはしない。腐った人間共の街は休む事を知らず、稼動し続ける。俺のような野良はゴミを漁り、人間の店から食べ物を奪い、生きる。それが俺の生きる世界なのだ。

…ん？

俺の頭の上に影が覆つた。頭を持ち上げると、オレンジ色の傘が差し出されていた。傘の持ち主の女は、にっこりと俺に笑いかけた。人間は都合の良い生き物だ。その時、可愛いなんだの言つて、生半可な愛情をばらまく。そして飽きたらポイだ。優しい仮面を被つた悪魔。奴らには勿体ないくらいの名だろつ。

俺は女を無視し、いつもの場所へと向かう。俺には、あいつ以外の人間に優しくなんかしてもらいたくない。そんな一時的の愛情なんていらない。…自分が悲し過ぎるだろ？  
女は少し淋しそうな顔をして、去つて行つた。

やつぱりな。

「おお、クロ。待つてたぞ」

赤鼻の爺さんは俺を見るなり、嬉しそうに手招きした。

ここが俺の居場所。

人間を憎んできた。

仲間も作らなかつた。…でも、一人つても、結構寂しいんだぜ。居場所がないとダメなんだ。どつかにさ、帰れる場所が一つでもないと生きてる事が息苦しくなつちまつ。この爺さんも一緒に。寂しくせに一人でいようとするんだ。でも我慢できないから、酒といつやつで自分をこまかす。俺と同じで素直じゃない。

「まつたく、こんなに濡れちまつて」

と爺さんは言つと、ボロボロになつたタオルで俺の体を拭く。俺はぶるぶると体を振るつた。水しづきが飛び、爺さんは苦笑いをする。

「おいおい、俺まで濡れちまうだる」

毛に染み込んでいた水分が飛び、少し体が軽くなつた。

「今日は雨だ。寒いし、寝るか」

爺さんはごろんと横になり、俺は爺さんの横に伏せた。

「おめえ、あつたけえな」

爺さんは笑いながら、俺を撫でた。

爺さんの酒臭い息はキライだつたけど、爺さんはキライじゃない。酒の臭いに顔をしかめる俺を見て、爺さんはいつも笑う。やな奴。でも酒つて、あんまり体に良くないんだろ？爺さんの体の中が良い状態じゃないって事が臭いでわかる。酒なんて止めてほしいものだ。俺より先に死ぬなよ。俺の居場所…またなくなるじゃねえか。

いつの間にか眠つていた。目を開けると、雨は止んでいて、雲の間から陽射しが差し込んでいた。いくつも大きな水溜まりが陽の光に反射して、キラキラと輝いていた。

雨上がりはスキ。

側では爺さんがデカイいびきをかきながら、まだ眠つていた。俺はそつと立ち上がる、テントから出た。ふらふらと、あてもなく散歩へと出た。じょりく歩くと、公園にあ

の女の姿を見つけた。あの女はバカだ。あんな所に女一人で入るなんて。どうなつても知らないぞ。俺は公園を通り過ぎようとしたが、何だかあの女が気になつた。オレンジ色の傘が田にちらつく。

仕方ねえ。いつちょ、見て来るか。

遠い昔、公園というやつは憩いの場だつたらしいが、この街の何処に憩いなんて求められるのだろう？荒れた公園には、爺さんと同じサウ、エツヂと呼ばれている奴らがいる。だけどこの奴らは、最低最悪。生きるために人を襲つたりするんじゃない、自分の快樂のため。こいつらには、お遊び。たちの悪いガキンちよだ。

「ヒヒヒ…あんたこんなトコで何してんのぉ？」

一人の男が首を傾げながら女に近づいて來た。焦点の合わないぎらぎらした眼、にたにたと下品な笑みを浮かべている。見るからに関わつてはいけないタイプ。

「人を捜しているの。ここに、小さな男の子はいない？黒髪で瞳の色も黒なのよ」

だが、この女は平然として男に尋ねた。

「男の子お？どうかなあ。ヒヒヒ…」

話しになる訳ない。

女は溜め息をつくと、公園から出ようと向きを変えた。

「あれー？行っちゃうのぉ？俺と遊ぼうよ。ヒヒヒ…」

女は男を無視し、歩を進める。

「ちょっと待ちなよお」

男は女の肩に手をかけ、引き止める。すると女は振り向き、キッとブラウンの瞳で男を睨みつけた。力強い澄んだ瞳には、男を怯ませるだけの力はあつた。男は顔を強張らせ、すっと手を引いた。女は何も言わず、公園をあとにした。

「はあー」

公園から出た女は路地の壁にもたれ掛かり、息を長く吐いた。

「…？あなたは、さつきの子？」

女は俺に気がつき、目線を落とした。

「正直怖かったのよ」  
と女は、苦笑いした。

意外。結構凄みがあつたぞ。

「私ね…息子を捜しているの。あなた知らないかしら?」

生憎だが、知らねえよ。

「ふふふ…」

女は俺の顔を見て笑つた。

何だよ。何か付いてるか?

「あなたに聞いたって仕方ないわよね」

女はそう言つと、淋しく笑つた。

「でも…聞いてくれるかな?私の話」

いいよ。聞いてやるぜ。

雨上がりの俺は機嫌が良い。

俺は女の傍に伏せ、聞く態勢をとつた。

「あなたって、不思議な犬ね」

女はにつこりと笑うと、腰を下ろした。

「私ね、息子を捨てたの。本当は手放したくなかった。でも、私は追われている身だから仕方なかつた。…ううん、仕方ないって思いたいだけね。自分が逃げるためにあの子が邪魔になつただけよ」

女は俯き、黒髪が顔を隠した。

「あの子を抱きしめたいとか手に戻したいとか、そんな贅沢な事望んでない。ただね…名前を教えてあげたいの。私、逃げるためにわ

ざとあの子に名前をつけなかつた。私との関わりを断つために。私があの子に名前を教えたいくつも思つたのは、愛してゐて事を伝えたいだけなの。名前を、私の方的な愛情を受け入れてほしいなんて願わない。…だけど今さらかな？」

泣いてる…？

女の肩が小刻みに震えていた。俺は女に近寄り、女の右手の甲をペロリと舐めた。

教えてやればいいじゃん。それが今さらだつたつて、一方的な愛情だらうが、あんたの気持ちが少しでも晴れるんじやないか？後は息子の中の問題だろ？どんな結果を生もうとさ、止まない雨はないぜ。

「ありがとう。あなたつて本当に不思議」

女は涙を拭いながら、俺の頭を撫でた。

俺は慣れない事をした氣恥ずかしかとありがとうつて言葉に胸がくすぐつたかった。

「何だか気持ちがすつきりしたわ」

女は元気よく立ち上がつた。ふと空を見上げると、再び雲行きが怪しくなつていた。

「じゃあね」

女は俺に手を振ると、人込みの中へと消えて行つた。

俺は女の後ろ姿を見ながら、言い知れぬ不安を抱いていた。

この不安定な天気のせいだらうか…？

しばらく何週間も不安定な天気は続いた。と、いつても、気温の落差が激しいこの世界での天気なんてのはいつも気まぐれだがな。だ

が、雲がなかなか晴れないのも珍しい。

「なーに不機嫌な顔してんだ?」

爺さんはそう言って、空を見上げていた俺の頭をくしゃくしゃつて撫でた。

うん…。何だかさ、嫌な予感がするんだ。気のせいかな?

「そういやあ、最近この辺に政治犯が潜んでいるって、警察隊がうるさいなあ。この世界を変えようだのって革命組織…確かに、純黒つて奴らが動いているらしいが、馬鹿な輩だな。もう、何十年…いや、何百年つてかかるてこの世界が形成されちまつたんだ。そういう簡単に壊せるもんじゃねえよ」

爺さんは、俺を撫で続けていた。

「無駄なあがきだよなあ。…だけど、奇跡を待つて死ぬより、あがいて死んだ方がいさぎいいかもな」と、爺さんは真面目な顔をして言つた。

政治犯……。

『追われている身だから』  
もしかしてあの女…。

じゅりつと足音がし、テントから覗くと、モスグリーンの警察隊の制服を着た男が二人こっちにやつて来るのが見えた。

「おい、あんた、この男と女を見なかつたか?」

男の一人がペンのような銀の棒を出した。それを横にして、先端部分を力チツと押すとB5サイズぐらいの大きさの映像が現れた。そこには、髪はブロンド、瞳は淡いグリーンの男とあの女の顔が映し出されていた。

「知らねえな」

「かくまうと、牢獄行きだぞ」

「悪いが、かくまうも何もこいつらと会つた事もねえし、見た事もねえよ。わざわざこんな汚ねえ所に足を運んでくれたんだが、むだ足だつたようだな。」<sup>(コ)</sup>苦労なこつてえ」と、爺さんは皮肉っぽく笑つた。警察隊員は怪訝そうな顔をしたが、爺さんを相手にするのは時間の無駄だと思つたのか、何も言わずに去つて行つた。

爺さんは懐から酒のボトルを出すと、勢いよくぐいっと呑んだ。

「胸糞悪い奴らだぜ」

爺さんは奴らの後ろ姿を睨みつけながら、言葉を吐き捨てた。

あの女…平氣かな？

「ん？ クロ、どつか行くのか？ 奴らが近くでうるさくしてから、氣いつけるよ」

街中を少し歩くと、銃声が聞こえた。

「パン、パン！…」

あつちの方だ！

音のする方に行くと、数人の警察隊員と物影に隠れている一人の人間の姿があつた。それは、警察隊が捜していた二人。男も銃で応戦する。女は、身を縮ませていた。

「二人は、純黒の中心幹部だ！ 撃ち殺して構わん！…」

銃弾の嵐。辺りの人間達は既に、家や店に逃げ込んだようだ。

「クソッ！ しつこい奴らだ！！ アリサ、悪いが耀の事は諦めてくれ」<sup>(ヨウ)</sup>男は、顔を歪ませながら女に言った。

「もう、あの子を捜す事は無理なの！？」

と、女は顔上げて男に言つ。

「ああ、もうタイムリミットだ。予定より大分早いがな。これ以上時間を割くと、亡命どころか、生き延びる事ができないぞ。俺にはそんな事できない。あいつとの約束なんだよ。君を護るつていうね」「あの人も残してくれたあの子にもう一度逢いたかったけど、これは私の過ちへの報いなのね。わかつた。ごめんなさい、わがまま言つて」

「バーン!!」

一発の銃弾が、男の右肩を捕えた。

「うつ……」「

「ジャン!?」

女が右肩を押さえうずくまる男に、ハンカチを当てる程度の応急処置をしている間に、警察隊員の隊長らしき男が近づいて来ていた。「さあ、お遊びはこれくらいにして貰おうか。私達も君達輩を構っている程、暇ではないんだ」

女は咄嗟に、男が落とした銃を拾い、隊長に銃を向ける。

「こ、来ないで!!」「

「手が震えているぞ」

と隊長はあざけ笑うと、ゆっくりと女に銃を向けた。

「ガウ、ガウ!!」

俺は吠え、隊長の意識を反らした。俺は振り向いた隊長に突進し、押し倒した。

「な、なんだこのクソ犬?!!」

隊長は突然の事に驚き、手足をばたつかせる。

「あなたは……」

女は呆然として俺を見ていた。俺はそれに苛立ち、唸つた後に、一言呟えた。

何してんだ!早く逃げる!!死んだら、息子に会うビジョジやねえだろ。

「ジャン、今の内に」

「ああ」

二人は立ち上がり、逃げ始める。

「このクソ犬つ！！」

「ズドーン！！」

「キヤン！！？」

俺は銃で撃たれて、倒れた。黒い体を滲み出した自分の紅い血が染める。

「！？」

俺なんか気にすんじゃねえっ！！

女は俺の方に振り向いた。

俺は立ち上がり、力を振り絞って吠える。そして、銃弾をぶち嘘ましている奴らに襲いかかった。

女は眼に涙を溜めながら、逃げて行つた。

夕日か…。綺麗だな。

もう目の前が霞んできているのに、オレンジ色に輝く夕日は俺の目にはっきり映つていた。その夕日は、あの女が持つていた傘色だった。何であんな女を助けちまつたんだろう？優しくされたからかな。しかし、俺らしくもしない事したな。バカみてえ。俺は弱々しく、自嘲する。こんな時つてのは意外に落ち着いているもんだ。…爺さん、「ごめんな。俺、あんたを独りにしちまう。許してくれよ。

雨が、また降り始めた。それはクロの死を悲しんでいるかのような土砂降りの夕立だった。彼の紅く染まった体は、いたわるようにな

綺麗に洗い流された。

赤鼻の爺さんは、しばらへやつて来ないクロの事をなんとなく予感していた。

ある日、久しぶりに激しい雨が降っていた。赤鼻の爺さんはふと、雨の中からこっちに向かってくる影を見つめた。

「クロ…？」

ぼつりと呟いた。

「クロ…？クロなのか？」

赤鼻の爺さんは、近づいてくる影に呼びかけた。影は、焼き消されそうになつてゐる声をなんとか聞きとつていた。影は赤鼻の爺さんの田の前まで来ると、尋ねた。

「クロ…？それって、僕の名前？」

影の正体は、黒髪に黒い瞳の少年だった。

「……ああ、そうだ」

この少年は後に、クロと呼ばれる。

彼の本当の名は—

耀

だが、彼がそれを知る事はなかった。

D

EN

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5799a/>

---

雨音～クロの真実～

2010年10月21日21時49分発行